



# 特集 外山警部補をしのんで

**昭和** 42年1月、本市(当時川内市)隈之城町で、前途ある一警察官の命が、突如として奪われた。外山輝宣(とよやまてるのぶ)巡査(殉職後、2階級特進により警部補)、当時19歳、その人である。後に、この事件は「外山警部補殺人事件」と呼ばれ、丸腰ながらも犯人に立ち向かった勇姿が警察官の模範であるとして、50年の節目を迎えた今日でも語り継がれている。ここに、その外山警部補をしのび、事件から今日までの経過をたどる。

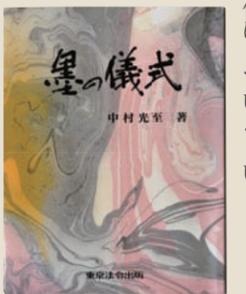
**\*** 昭和42年1月5日22時35分頃、阿久根市牛之浜の道路上で、帰宅途中の保険外交員の女性が刃物を突きつけられ、現金と保険証書などが入ったハンドバッグを強奪されるという事件が起きた。犯人はそのまま盗難車で川内方面へ逃走。阿久根署から川内署に協力要請が入り、川内署から5人の警察官が国道3号での検問を開始した。その中の一人だった外山巡査は、夜中からの後半勤務に備え仮眠中であつたが、一報を受け、警棒のみを身に付け、緊急配備に就いていた。同23時10分頃、犯人の車が検問を無視して突破。外山巡査ともう一人の巡査が直ちにパトカーで追跡を行い、10分後、隈之城町で犯人を追い詰めた。犯人は車を乗り捨て、国道脇の田んぼへと逃走。すぐさま後を追った外山巡

査は格闘の末、犯人が隠し持っていた刃物によって胸などを刺された。薄れゆく意識の中、渾身の力を振り絞って自ら警笛を鳴らし、もう一人の巡査に居所を伝えると、「後を頼みます」と虫の息でそう告げた。辺りには「墨」を塗ったような漆黒の闇が不気味に広がっていた。その後、搬送された病院で、奇跡的に一時意識の回復をみせると「すみません…犯人を逃がして」そう上司に告げた。6日2時30分頃、周りの願いむなく、若い命の灯は静かに消えた。これが、「外山警部補殺人事件」の概要である。

**\*** 一方、現場から逃走した犯人は事件翌月に出頭し、逮捕されることとなる。自動車窃盗や強盗未遂の余罪がある、当時24歳の男であつた。その後、懲役15年の判決が言い渡されている。

**\*** 既に半世紀が経過しているこの事件。その内容はノンフィクションノベルとして『墨の儀式』に収められた。この書には、事件当日の状況や事件後の犯人逮捕に全力を注ぐ警察関係者の様子が詳細に描写されている。同事件を取り扱った書は、同著者によって幾度か衣替えされ出版されているが、この『墨の儀式』が最新本であり、入手できる唯一の本となっている。また、鹿児島県警の警察学校では、警察官としての職務倫理教育の一環と

して、入校生に対して、この本を課題とした感想文作成に取り組みさせており、警察官の原点である使命感を意識付けしているという。



▲『墨の儀式』 中村光至 著 (東京法令出版)

**\*** 隈之城町の外山警部補の殉職現場には、「顕正之碑」と記された碑が建てられている。

外山警部補の一周忌に当たる昭和43年1月5日に除幕され、現在は地域の住民や薩摩川内警察署、警察学校の生徒などが定期的に清掃に訪れ、献花を行っている。



▲ひっそりとたたずむ「顕正之碑」=隈之城町(国道3号に案内看板あり) ▲碑の裏面には事件の概要が刻まれている

## あ、外山警部補

作詞 吉見虎雄  
作曲 下箇和郎  
編曲 下箇雄一郎

一、霧の小雨の 夜は更けて  
道行く人の 影も絶え  
寒風身にしむ 橋たもと  
夜汽車の音も 遠く消ゆ

二、疾風の如く 車ゆく  
国道三号 異常あり  
まなじりあげて あと追えば  
ひときわしげし 夜の雨

三、凶刃闇に ひらめきて  
深傷を負えど かえりみず  
泥にまみれし 格闘に  
力尽きはて 殉職す

四、あ、十九の 春またで  
若き生命は 露と消ゆ  
外山警部補 今はなく  
恨みは深し 五日夜

む手を離さなかつたことが、後の解剖結果からうかがえると、本に明記されている。

長女のトシエさんを姉にもち、次女のさちえさんと三女かずえさん2人の妹に囲まれて育つたためか、外山警部補は優しく温厚な性格だったという。また、非常に真面目で親孝行な少年だったと振り返る。そんな息子を突然失つた両親の悲しみは如何ばかりだったであろう。両親は既に他界し、当時の心境は闇の中だが、「警察官になった時点で覚悟をしていたのか、取り乱すようなことは一切なかつた」とトシエさんは口を揃える。

かつて生家のあつた敷地内に墓は建てられ、現在、外山警部補は最愛の両親と共に、安らかな永遠の眠りに就いている。



**\*** 外山警部補は曾於市末吉町南之郷で生まれ育つた。その地で、遺族の方にお会いし、話を聞くことができた。

実家は農業を営む6人家族。一人息子であつたため、父親の静男さんは厳しくも温かく、外山警部補を育てた。柔道を習わせたり、泳ぎを教えたりと、強い体になるよう常に支えていたという。警察官になる夢を叶えた息子を誰よりも誇りに思い、見守っていたことだろう。

父の期待どおり、強さと実直さを身に付けた外山警部補は、負傷した体の箇所から、凶刃に倒れるまで犯人を掴



▲外山警部補の墓石  
左から長女：トシエさん、三女：かずえさん、次女：さちえさん



▲当時の川内南中学校の先生によって作られた歌「あ、外山警部補」は、墓石の横に刻まれている。

あ、外山警部補

作詞 吉見虎雄  
作曲 下箇和郎  
編曲 下箇雄一郎

一、霧の小雨の 夜は更けて  
道行く人の 影も絶え  
寒風身にしむ 橋たもと  
夜汽車の音も 遠く消ゆ

二、疾風の如く 車ゆく  
国道三号 異常あり  
まなじりあげて あと追えば  
ひときわしげし 夜の雨

三、凶刃闇に ひらめきて  
深傷を負えど かえりみず  
泥にまみれし 格闘に  
力尽きはて 殉職す

四、あ、十九の 春またで  
若き生命は 露と消ゆ  
外山警部補 今はなく  
恨みは深し 五日夜